

寛容の心を持ちなさい

奨励	越川 弘英〔こしかわ・ひろひで〕
奨励者紹介	同志社大学キリスト教文化センター副所長 同志社大学キリスト教文化センター教授
研究テーマ	キリスト教の実践神学（礼拝、宣教、牧会）

そこで、主に結ばれて囚人となっているわたしはあなたがたに勧めます。神から招かれたのですから、その招きにあずかり歩み、一切高ぶることなく、柔和で、寛容の心を持ちなさい。愛をもって互いに忍耐し、平和のきずなで結ばれて、霊による一致を保つように努めなさい。

（エフェソの信徒への手紙 4章1—3節）

「寛容」ということ

「一切高ぶることなく、柔和で、寛容の心を持ちなさい」。

今学期のチャペル・アワーのテーマとして、この聖句を選びました。すでに配らせていただいている「チャペル・アワー案内」（223号）のテーマ解説にも書きましたが、辞書で引くと、「寛容」とは「寛大で、よく人をゆるし、受け入れること」とあります。つまり、広やかな心、他者を認め、ゆるし、受け入れる大きな心のことと言っていいでしょう。聖書はそういう広やかな心を持ちなさいと勧めているのです。

今学期、あえてこの聖句を選んだのには理由があります。それは、ここ数年、とりわけ昨年以降でしょうか、私たちの社会のなかに、こうした寛容の精神とは相容れないような、イヤな雰囲気が強くなってきているように思われるからです。

国内的にも国際的にも、そして政治的にも経済的にも、また文化的にも、実にさまざまなか所で、とげとげしく乱暴な、狭い心、ゆるさない心、受け入れない心が、あちこちから噴出している感じがします。同じ意見をもった者だけが寄り集まれば、自分たちが「敵」と見なした相手を徹底して否定したりとことんまで攻撃する雰囲気、そしてそれに付和雷同する無責任な言葉があちらにもこちらにも燃え広がっていくような雰囲気です。

ある特定の相手を「仮想敵」とすることによって、ひとつの集団が結束するというやりかた、あるいはその集団を結束させようとするやりかたというのは、昔から繰り返し繰り返し行われてきた方法です。身近なことで言えば、小はスポーツにおいて相手チームを「敵」とすることで「味方」が一致結束して応援するということがあります。また、大は国家間の関係や、民族・人種の関係、あるいはまた諸宗教の関係などにおいて、そうしたことが起こることもしばしばありました。スポーツの場合はまだしも可哀げのあることと言えるかもしれませんが、国家・民族・人種・宗教などという次元になると、これは笑ってすませられる問題ではありません。

かつて第二次世界大戦において、日本はアメリカやイギリスを「鬼畜米英」と呼び、この敵に対して国民を結束させようとした。さすがにそこまではいきませんが、昨今、私たちの周囲では、領土問題や歴史認識の問題をとおして、隣国である韓国や中国を一種の「仮想敵」とみなすような言動が、いろいろなところでくすぶっています。

大手のマスコミのなかにもこうした問題を無責任にセンセーショナルな話題として取り上げているところがありますが、草の根レベルでもネットなどを通じて中国や韓国などに対する異常な感じの攻撃や非難、否定がこれでもかこれでもかと投げつけられているのを目にして、寒気を覚える気がします。

多様なものの見方、相手の立場に立つ

話をもとに戻しますが、「寛容」というのは、ただに「なんでもかんでも受け入れますよ」「あれもこれもOKですよ」ということではないと思います。そういういかげんな寛容は、結局、自分とは何の関係もないものに対して向ける態度であって、「私にとってそれはどうでもいい」と言っているのと同じことでしょう。それは「無関心」であって、寛容の精神とはまったく異なるものです。

寛容とは、相手に対してまじめな関心を寄せつつ、相手を受け入れる広い心です。そしてここで相手を受け入れるということは、必ずしもいつも相手に賛成するとか同意することではありません。寛容というのは、自分一個の価値観としては、「私はこれが正しいと思う」「私はこれこそ真理だと思う」ということをきちんと踏まえた上で、「しかし、だからといって、あなたの意見を無視することはしない」「あなたが正しいと思うことも尊重する」ということであると思うのです。そうした姿勢の根本にあるものは相手に対する敬意であり、相手の存在、人格を認めるということでありましょう。

最初に申しました、最近の私たちの社会におけるイヤな雰囲気というのは、端的に言って、そうした「他者」に対する敬意を見失った雰囲気のことであり、個人であれ国家や民族であれ、その存在や人格を否定するような雰囲気のことでもあります。私があなたの存在を否定すれば、たぶんあなたも私の存在を認めようとはしないでしょう。互いに否定し合いながら、それでいて隣り合って生きていかなければならないとしたら、いつどこで不測の事態が生じないとも限りません。個人同士の関係も、国家間の関係も、民族や宗教の関係も、基本的には、つねに相手を理解しようとする努力の積み重ねの上にか成り立たないということは自明のことだと思うのです。

グローバルな人間

昨今、社会ではグローバルという言葉が大流行しています。同志社大学にも、グローバル・コミュニケーション学部、グローバル地域文化学部というふたつの新しい学部が最近作られました。

グローバルというのは「地球的規模の、地球大の」ということですが、それはただ「大きな規模で考えよう」とか「地球はひとつだ」みたいなことだけを強調しているわけではないでしょう。グローバルという言葉のなかには、この世界の多様性と未知なるものの広がりを目を向けようということも当然含まれていると思うのです。地球上には、私たちがまだ全然知らない人びとがたくさんいて、私たちが異なる発想をしたり、私たちが思いもよらない価値観をもって生きているのだという洞察、そしてそれへの期待と関心ということが、この言葉のなかには込められていると思うのです。

地球だけでなく、私たちの世界と歴史、そして人間の存在そのものが、私たちが今考えているよりもはるかに複雑で、多種多様で、不思議と驚きに満ちているのではないかとこのことを頭に置けば、私たちはつねに自分自身に対して謙虚でなければならぬと思います。自分自身が実に小さい存在であること、何も知らないという事実謙虚に向きあわなければならないと思います。私たちの知らない世界、分からないことがたくさんある。しかしだからこそ、いろいろな人と出会い、経験を重ね、成長していくことが起こるのです。

成長すること、成熟することとは、いろいろな変化を重ねることであり、多様で重層的なものの見方ができるようになることであり、他者の意見や他者の存在を受け入れることができるようになることであり、しかもその上で、自分の意見や自分の立場、自分自身をしっかり保つということです。換言すれば、「仮想敵」のようなものを作らずとも、そして自分の意見に付和雷同するような「仲間」がいなくても、「私は私です」と言える、「私はこう思います」「私はこのように生きます」と静かに、しかししっかりと言うことができる人間となるということです。傲慢さのゆえではなく、謙虚な出会いと学びによって、そしていろいろな発見と洞察と反省の積み重ねのなかから、柔軟でありながらきちんと自己の信念をもった人間、全体をきちんと見通しながら自己のアイデンティティを確立した、文字どおりグローバルに通用する人間となっていくということ、それが成長であり成熟です。

大学生生活における成長・成熟

皆さん。誰もが同じことを言う時代が来たら、ちょっと群（むれ）から離れて、自分の頭でいろいろな角度から考えてみるようにしてください。皆が同じ方向に向かって進み出したら、一歩身を退いて、全体を見渡して考えてみるようにしてみてください。

とくにネット社会の時代に生きる皆さんに対しては、このことは何度も想い起こしてほしいと思います。ネットから得られる情報というのは、一見すると無限のようである、実はきわめて一面的なものとなりうるということをもつ頭の中に入れておいてください。ネットは便利です。自分の欲しい情報をいくらでも取ってこることができます。自分の好きな「仲間」といくらでも繋がることができます。しかしそこに大きな落とし穴があるということも事実です。自分の欲しい情報だけを手に入れ、自分の好む相手とだけ繋がるといのは、結局、私たちに何の成長ももたらしません。ネットの限界を知った上で、それに使われる人間ではなく、それを使いこなす人間になりたいものです。

繰り返しますが、私たちが成長し成熟するのは、私たちの知らないさまざまな情報に出会い、人間に出会い、そして経験に出会った時なのです。異なる意見、異なる人間、異なる経験が、私たちを新たなものの発見に導きます。そういう意味で、この大学という場を置く皆さんには、いろいろな人とのお出会い、いろいろな知識や情報との出会い、いろいろな経験との出会いを、意識的に選びとって日々を過ごしていっていただきたいと思うのです。

皆さんが4年間の大学生生活を終える時、自分がたしかに変ったかどうか、たしかに成熟したかどうか、たしかに新しくなったかどうかを測る大切なバロメーターのひとつは、ただ今申しあげてきたような寛容の心、「広やかな心、よく人をゆるし、受け入れる心」を身につけ、自分自身を省みてきちんと評価反省もしながら、なおかつ一個の人間として柔軟かつしっかりと自立した人間となり得たかどうかということにあります。

聖書の時代でも今日でも、この世界にはいつも、偏見、差別、非道、憎しみ、嫉妬、恨みなど、さまざまな悪へと私たちを導く力がそこかしこにたむろしています。とりわけ現在という時は、そうした力が陰に陽に怪しく大きくくぐもっている時代のように思われます。だからこそ、それを見抜く眼とそれを乗り越える知恵と力を、私たちは身につけたいと思います。

この大学という場で共に学び、そして共に成長・成熟していきましょう。

<HPでは傍点等を省略しております。詳細は冊子体の『チャペル・アワー奨励集 292号』をご覧ください。>